

ルター時代の女性宗教改革者アルギュラ・フォン・グルムバッハの 自由と抵抗についての一考察

伊勢田 奈 緒

1. はじめに

16世紀における宗教改革期に実に多くの女性達が信仰と政治の問題に深く関わっていることに驚かされる。たとえば、カトリック信奉者であるイングランドのギーズのメアリ女王やスコットランドのメアリ女王、フランス文芸復興の一翼を担い、福音主義を支援したナヴァール女王マルグリート、イングランド国教会を確立させたエリザベス女王等、挙げればきりがないほどである。特に注目すべきは16世紀におけるこうした女性達の政治と信仰に深く関わるという現象は権威ある上層階級だけではなく、一般の者にも波及していたことであるが、その一人がアルギュラ・フォン・グルムバッハである。彼女は恐らく、最初的女性政治記者であり、論争のために印刷術を巧みに利用し、いくつものタブーを破った。最初のプロテスタントの女性ライターであった。宗教の問題に関しては、女性が公言できる権利を擁護するために、彼女は聖書への自由で画期的なアプローチを行った。他方、福音主義を支持し、大学や教会、裁判所の不正、不義に挑戦するため、8つのパンフレット（小冊子）を出版した。その最初のものであるインゴルシュタット大学に対する書簡は、14版にも及んだという。このような挑戦的な方法で、彼女は、それまで女性は公けの場では沈黙を守ることとされていた社会に一大旋風を巻き起こしたが、他方、彼女へのカトリック側の攻撃も激しいものであった。これまでアルギュラに関する研究はあまりなされてきていなかった。その原因は第一にドイツの宗教改革はルターやメランヒトンなどの主なる改革者の研究が中心であり、第二にアルギュラの活動の場が対抗宗教改革運動の中心地域であり彼女の働きや思想は無視されてきたという経緯がある。最近、アルギュラの全著作の現代語訳を完成したり、また実際、彼女に関する研究に取り組んでいるマチソンによれば⁽¹⁾、アルギュラの生涯について、女性学とドイツ文学界が今、関心を示しているようである。しかし、彼女の思想と行動の重要性はまだほとんど理解されてはいないとしている。本稿の目的は、平信徒で、修道院や大学で聖書解釈の正式な教育を受けているわけでもなく、また4人の子の平凡な主婦であるアルギュラ・フォン・グラムバッハがルターの改革思想に共鳴し、アルザシウス事件（後述）をきっかけに、ルターの説くキリスト者の「自由」の理解の下、言論によって「抵抗」という手段をもって改革運動をどのように実践していったか、その展開を考察していくことで、ルターの運動の一つの具体的な展開と意義を示すことである。

2. アルギュラの生涯

アルギュラ・フォン・グルムバッハは1492年、ホーエンシュタウフ家のバイエルンの分家のベル

ンハルディン・フォン・シュタウフ (Berunhardin von Stauff) の娘で、バイエルンの伝統と教育を重んじる教養のある家庭で育った。彼女の家は非常に敬虔な家庭であり、たとえば彼女が10歳の時、父がラテン語『ウルガータ聖書』からのドイツ語訳の美しく高価なコーブルク版の聖書を与えられたという。また家族にはシュタウフ家独自の祈祷書があった。当時、貴族と領邦君主間の抗争が打ち続き、そのため彼女の家も没落していく。アルギュラは15、6歳の頃、バイエルン公の母であり、マクシミリアン皇帝の姉妹であるバイエルン太后妃クニグンデの女官として育てられるためにバイエルンの宮廷に送られた。クニグンデの下で、彼女は十分な教育を受け、美しいドイツ語が使えるようになったがラテン語を学ぶ機会はなかったようである。彼女は非常に残酷で悲劇的な少女時代を過ごした。すなわち、彼女が宮廷について間もなく、両親が次々にペストによって亡くなった。その後、彼女の叔父ヒエロニムス・フォン・シュタウフが後見人になって、世話をしてくれることを誓ってくれたが、その叔父も政治的陰謀に巻き込まれて、最後は斬首されてしまう。その後、ヴィルヘルム公¹が彼女の父親代わりになることを申し出た。1516年、彼女はフリードリヒ・フォン・グルムバッハと結婚した。彼は貧乏貴族であったので、結婚によってバイエルンのディートフルトの行政官に任命され、それに伴う俸給を受けることを喜んだ。彼女の著作から推察すると、夫グルムバッハはエネルギーで革新的な妻に比して、平凡な人だったようである。

アルギュラは、1523年にインゴルシュタット大学でアルザシウス事件に出会い、そこから彼女の宗教改革運動の実際の活動が始まり、同時に著作活動を行うことになる。四人の子ども（ゲオルゲ、ハンス・ゲオルゲ、ゴットフリート、アポロニア）の教育は、夫が生きている時でさえ、彼女が主導権を握りその教育方針は福音主義の考え方に基づくものであった。夫婦関係については、決まとうまくいっているようではなかったことが、たとえば、1524年に刊行された彼女の長い詩から判断できる。その詩の中で、たとえば、彼女が家庭の務めを行っていないとか、カトリック教会に忠誠を誓っている夫に対して、彼女が愛と尊敬を示すことを怠っている等、相当激しい非難を受けていたようであり、それに対して彼女も、怒りをこめて論駁している。にもかかわらず、「神が、私が理解できるように教えてくださいのように。どのように、私は夫に対して振舞うべきなのかを。」

⁽²⁾という弱気な一文があったり、また彼女の叔父アダム・フォン・テーリング宛の書簡の中では、夫が彼女の中にあるキリストを圧迫してきたとも訴えていたりしている。ところで、注目すべきことは、アルギュラが自由に福音主義を支持し、抵抗運動が行えたのは、非常に限られた期間であったことである。彼女が執筆活動を止めたちょうどその頃、農民戦争が勃発し、ドイツ国内が混乱の中にあった。1530年に夫グルムバッハは亡くなるが、1533年に彼女はボヘミアに土地をもっているカウント・フォン・シュリックと再婚した。しかし1535年に、彼も亡くなり、彼女はグルムバッハ家の不動産管理に四苦八苦し経済的に困窮する中、1539年に娘のアポロニアと息子のゲオルゲが、1544年に息子ハンス・ゲオルクが亡くなるという不幸に見舞われた。さらにアルギュラにとって衝撃的な状況は、1546年におけるルターの死、また同年からシュマルカルデン戦争が始まり、福音主義側の敗北に終わることになり、1552年のパッサウ条約を経て1555年アウグスブルク宗教和議が行われたことである。彼女自身は1556年乃至1557年に亡くなったとされる。²

3. アルギュラ・フォン・グルムバッハによる宗教改革運動への実践と思想

3.1 アルザシウス・ゼーホーファの事件

上記のようにざっとアルギュラの生涯を見たが、ここで、アルギュラが実際に宗教改革運動家として活動することになったアルザシウス・ゼーホーファ事件について考察しよう。この事件は1523年に彼女がヨハン・エック³率いるインゴルシュタット大学の神学部の教授陣に公開討論を申し出たことに始まる。15世紀後期にはインゴルシュタットは宗教的ヒューマニズムの影響を受け、また他のドイツの都市や町と同様、ルターの著作が入ってきていた。しかし、インゴルシュタットの大学や行政機関はカトリック教会信奉者の勢力が強く、また特に贖宥状論争以来、ルターの論敵であり続け、大学学長代理で、教皇庁書記長であった神学教授ヨハン・エックが神学部だけでなく大学全体に大きな影響力があった。そして大学側はルターの運動を警戒し排除しようとしていた。具体的には、聖餐は二種に分けるべきだと主張したインゴルシュタットのフランシスコ修道会管区長が弾劾されたり、書籍販売者たちはルターの著作を持ち込んだかどうかを組織的に調べられたりした。また大学関係者らすべては異端思想を審問され、宗教改革思想を持つ者は弾劾されていた。

以上のような背景の中で事件は起こった。アルザシウス・ゼーホーファは1503年頃、ミュンヘン生まれの富裕市民の息子でインゴルシュタット大学とヴィッテンベルク大学で学んだ。当時、ルターはローマ教会から破門宣告が下され、1521年、帝国追放刑を皇帝カール五世に言い渡され、ザクセンの選帝侯フリードリヒの保護の下、ヴァルトブルク城に隠れていた。故にアルザシウスはヴィッテンベルク大学では、ルターの協力者として働いていたメランヒトンの下で、信仰による義の福音を学んだ。またアルザシウスは、当時ルター不在の中、ヴィッテンベルク大学の急進的改革と市政の改革に指導的な役割を果たしていた過激派のカールシュタットの影響も受けたようである。彼はヴィッテンベルク大学においてローマ書とコリント書簡の講義に出席し、ヴィッテンベルクから持ち帰った荷物にはたくさんのルターやメランヒトンの著作があった。この時、18歳だったアルザシウスは、インゴルシュタット大学で学ぶことを辞めようと思っていたが、彼の家族が大学に席をおくことを勧めたことにより、大学に在籍し続けた。その後、彼は学位をとり、そのまま大学で教え始めていた。1472年にランツフート公ルートヴィヒ九世によってバイエルンで最初に創設されたインゴルシュタット大学は、1502年に新設されルターやメランヒトン等の改革思想をもった教授群を主軸としたヴィッテンベルク大学とは全く異なり、伝統を重んじ、既述したようにルターの不倶戴天の敵で彼を弾劾したヨハン・エックが実権を握っていた。このようなカトリックの牙城のような大学で事件は起こったのである。アルザシウスは、大学でパウロ書簡の講解を行ったのであるが、それがルターの解釈だったために、大学側から異端の嫌疑をかけられることになる。彼自身、大学で取調べを受けると同時に、彼の宿舍も家宅搜索された。彼の自宅からヴィッテンベルクから持ち帰ったメランヒトン、ルターの著作が発見され、彼は3度投獄された。しかし次に司教に宣告されれば、火刑になるところだったところを父親のたつての頼みによって、その難を免れ、バイエルン公と大学が彼の責任をとるということになった。大学側の神学委員会はアルザシウスの過ち

を17カ条のリスト⁴にして、彼に突きつけた。最後に大学と裁判所は一体となって彼が誤りを認め、ルターの教えを放棄すれば火刑は免じて、修道院へ監禁するという妥協案を出し、彼はそれに同意した。すなわち、アルザシウスは火刑を恐れるあまり、公けにその所信を撤回し、手を福音書におき、恥ずかしさのあまり涙をうかべて自分の過ちを公然と捨てることを誓い⁵、このような寛大な処置に対して、大学当局に感謝を述べたという。その後、彼は沙汰を待つ間、人里はなれた修道院に監禁された⁶のであった。

このアルザシウス・ゼーホーファ事件がアルギュラを宗教改革運動の中に直接、巻き込むきっかけになった。まず、彼女はアルザシウスが初心撤回を強制されたことを知り、直ちに福音派の牧師であるアンドレアス・オジアンダー⁷の意見を尋ねにニュルンベルクへ出向いた。この時、この事件に対してオジアンダーが何も良い策を講じてくれなかったことによって、彼女は義憤にかられて、彼女自身がインゴルシュタット大学へ異議申し立ての公開状を書いたのだった。この公開状の写しは、もう一通の文書が添えられてヴィルヘルム公のもとに送られた。それはヴィルヘルム公に宛てたものであったが、しかし明らかに行政官にも読んでもらうための文書だったのである。なぜならヴィルヘルム公の文書には、ゼーホーファ事件への異議申し立ての他、聖職者による財政的搾取と不道德な行状とを弾劾したものも挿入されていたからである。

3.2 アルギュラに影響を与えたルターの改革思想

マルティン・ルターが95カ条の提題を示した数年後、彼の宗教改革運動のメッセージを真剣に受け止め、それを具現化した一人がアルギュラであると考える。インゴルシュタット大学で起こったゼーホーファ事件以前の1519年に、ルターの説が異端と判定される最初の重要な論争がライプチヒで行われ、これはインゴルシュタット大学のエック対ヴィッテンベルク大学のルターの論争となった。この時、エックはローマ教皇をキリストの代理者として崇拝することを言明した。この論争ではエックが成功をおさめ、ルターはこれより、異端者として火刑に処せられたボヘミアの宗教改革者フス同様、異端に属することが判定された。しかし、ドイツ国民の大部分はルター支持をした⁽³⁾。彼は大学へ戻り抗議を続け、立て続けに多数の論文や著作を公刊したが、ルターの著作は民衆に広く読まれた。アルギュラも熱烈な読者の一人であったと想像される。

アルギュラに強く影響を与えたルターの思想であるが、その思想は彼が修道院に入り、厳しい修行生活を送りその生活の中で自分自身の邪悪さに苦悶する中で、キリスト教の根本精神、福音の再発見をしたのであった。それは、まず、人間が罪から救われるのはカトリック教会のすすめる善行によるものではなく、ただイエスによって示された神の愛を信ずる信仰のみによって与えられるとし、聖書の精神をくみとることが重要であるとする聖書中心主義を唱えた。一平信徒であるアルギュラによる、カトリック教会、インゴルシュタット大学、インゴルシュタットの行政当局、皇帝への異議申し立ては、ルターが説く信仰義認と、聖書中心主義、万人祭司主義に共鳴した彼女がその教えに根ざした真の信仰を忠実に実行しようと試みたものと言えよう。ルターはライプチヒ論争を経て、1521年に教皇レオ10世から破門された。アルギュラの運動はまさにルターの改革運動発展

の高まりの中で起こったものである。そして彼女が起こした運動の終結は、ルターの運動が大きく変わっていく1524年の農民戦争勃発当時に終わっている。そもそも、アルザシウス事件勃発当時から、ドイツ国内は、社会的、政治的な不安、動揺が広がっていた。1522年から1523年にかけて騎士たちが大諸侯に対して、没落しつつある自分たちの地位を防衛するために反乱を起こした。また、農民たちは農奴制廃止、封建地代軽減など『十二カ条の要求』を掲げ、再洗礼派ミュンツァー等の指導の下、ドイツ農民戦争を引き起こした。一連の問題は宗教改革運動の流れの中にあり、ルターの意図とは違うものだったとしても、明らかにルターの思想の影響を蒙っていた。たとえば、帝国騎士の隊長ジッキンゲン（1481～1523）やフッテン（1488～1537）はルターの教えに心を惹かれていたし、農民たちも宗教改革思想の影響を受けて、神の与えた権利に基づき、ローマ・カトリック教会に対する十分の一税の拒否に始まり、神から与えられた権利として変革を要求したのであった。自ら「農民の子」と称していたルター自身はこの農民戦争に対してはじめは農民を支持したが、反乱が領主制変革を目指して急進化すると、領主に武力鎮圧を進言し、農民の不信を買うようになった。

ルターは世俗の価値を宗教改革によって発見し、修道士から一般市民へと方向転換したが、その根底にはキリスト教徒であることに関する徹底した平等主義的な考えがあった。このルターの考えを忠実に受け入れ、アルギュラは不正、不義、不公平、不信仰に対して勇気をもって堂々と公けに異議申し立て、それまで一般女性は公けの場では沈黙すべきというタブーを破ったのである。ルターはたとえば、ガラテヤ書講義において「この世界においてまた、肉に従えば、人々に関して大きな違いや不平等があるし、しかもそれは大いに熱心に遵守されなければならない。女が男になろうと思ったり、息子が父親になろうと思ったり、弟子が教師になろうと思ったり、僕が主人になろうと思ったり、臣民が支配者になろうと思ったりしたら、社会的な身分やその他のことどもすべてにおいて、無秩序と混乱とが生じるであろう。これに反して、キリストにあっては律法がないのだから、人々の区別もなく、ユダヤ人もギリシア人といった区別などもなく、すべての者が一つである。…」⁽⁴⁾と説き明かしているように福音によってすべてのキリスト者は兄弟姉妹となるように自由を得ており、他の人々に対して一人のキリストとなる能力与えられた存在であると主張した。この義認に根ざした徹底的な平等主義的万人祭司説によって、ルターは聖職者とそれより下の身分としての一般信徒との間に横たわる、神との関係における質的な区分を一掃した。こうした立場を、ルターは、1520年の『キリスト教界の改善について ドイツ国民のキリスト教貴族に与う』でも「…私どもはみな司祭であり、みなが一つの信仰、一つの福音、一つの秘蹟を持っておるのであります。…」⁽⁵⁾と述べているが、当然、アルギュラもこの著書を読んでいたと思われる。ここにルターの平等観に根ざした改革思想の普及によって、アルギュラをはじめ、多くの一般信徒によって様々な形の抵抗運動が展開したと解せよう。

3.3 アルギュラのルターの思想の受容と実践

ここで、アルギュラのルターの思想を受け入れ、それをどのように実践していったかを考察する

ために、実際のアルギュラのゼーホーファ事件に対するインゴルシュタット大学の教授会へ宛てた痛烈な抗議文の概略は以下である。

「高名にして、誇り高く、家柄もよく、博愛で、気高く、たくましいインゴルシュタット大学の学長と教授会の皆様へ。(略) …あなた方が、アルザシウス・ゼーホーファに対して、投獄か、火刑かをもって脅かしてその神学の撤回を迫るようなことをされたと聞き、わたしの心も体も震えました。ルターやメランヒトンが教えたのは、神の言葉以外のなんでしょうか。皆さんは、彼らを罪あるものとなさいます。しかし、その理由を正々堂々と論じようとはなさいません。いったい全体、聖書のどこに、キリストや使徒たちや、預言者たちが、だれかを投獄したり、追放したり焼き殺したり、殺害したと記してあるでしょうか。わたしたちは、行政官に従わなければならないと、言われています。その通りです。しかし、教皇、皇帝、君公たちといえども、神の言葉に対しては、なんの権威もないはずです。…(略) …キリスト者でなかったアリストテレスをもとにして作られた教皇教書によって、神や預言者や使徒を天からひきずりおろすことができる、などと考えるので、どうか。パウロが女は教会で沈黙すべきである。(テモテ I 2:2) と言っているのを知らないわけではありません。しかし、だれも男性が発言しようとしないうち、できないとなれば、わたしは主の次の言葉に動かされるのです。『一人の前でわたしを受け入れる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受け入れるであろう。しかし、人前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう。』(マタイ 10: 32-33)。預言者イザヤの言葉は、わたしを慰めてくれます。『わたしは幼子を送って、あなた方の民とし、女たちはあなた方を治める』(イザヤ 3: 12) …(略) …皆さんは、ルターの全著作を抹殺しようとしておられます。それならば、彼が訳した新約聖書をまず抹殺しなければなりません。ルターとメランヒトンのドイツ語の著述に、わたしは、なんら異端的なところがあると思いません。シュパラティーン⁸は、ルターの全著作リストを送ってくれました。たとえルター自身がその言説を撤回するようなことがあっても、彼の説が神の言葉であることには変わりはありません。…(略) …わたしは、喜んで皆さんのところに出向き、ドイツ語で討論したいと思います。そのとき、ルター訳の聖書をお使いにならなくても、けっこうです。41年前に訳された版(1483年のコーブルク版)をお使いください。みなさんは、知識の鍵をもっておられ、天国の門を閉じることができるのです。にもかかわらず、みずから敗北を招いておられます。この18歳の青年に対してなされたことは、たちまち、わたしどもや、他の町々に知れ渡ったので、そのうちに全世界に知れるでしょう。主はアルザシウスを赦されるでしょう。…(略) …主を否定したペトロを主は赦され、投獄や火刑をもって罰されなかったからです。この青年はすばらしい益を与えるようになるでしょう。わたしがこう申し上げているのは、女だてらにお説教を述べたてているのではなく、神の言葉を伝えたいからです。キリストの教会の一員として訴えたいからです。地獄の門も、この教会に勝つことは出来ません。もっとも、ローマ教会なら話は別です。神が恵みをわたしたちに与え、わたしたち一同を祝してください。アーメン。」⁽⁶⁾

以上の文書の文面からまず、「ルターやメランヒトンが教えたのは」とあり、明らかに彼女がルターの教説を支持していることがわかる。次に「教皇、皇帝、君公たちといえども神の言葉に対し

ては何の権威もないはずです。」という指摘から聖書の言葉を最重視し、他方、人間の権威、すなわちローマ・カトリック教会や行政官の権威に対して公然と異議申し立てをしていることがわかる。この考え方はルターが『この世の権威について人はどの程度までこれに対して服従の義務があるか』やその他の宗教改革著作においてキリスト者が権威や戦争や抵抗について取るべき姿勢とその基本を明らかにしている点に呼応していると見なせよう。特にルターは抵抗権を問題にする時、「人に従うより神に従うべきである」（使徒言行録5：29）を典拠としていたが、彼女もまた、この聖句を基調としていた。次に彼女にとって最大のテーマである女性の公言できる権利について理解であるが、それは「パウロが女は教会で沈黙すべきであると言っているのを知らないわけではない。しかし、だれも男性が発言しようとしないうちに、できないとなれば、わたしは主の次の言葉に動かされるのです。…」という主張から、彼女がルターによるキリスト者の自由に基づく平等主義の解釈をもって、キリスト者は男性でも女性でも同様にキリストに公に信仰告白ができるのであるから、同様に、不正に対して男性も女性も、公けの場で抗することができるのであると独自の解釈に至っているのである。故に「わたしは、喜んで皆さんのところに出向き、ドイツ語で討論したいと思います。」と堂々と述べているのであろう。最後に「女だてらにお説教を述べているのではなく、神の言葉を伝えたいからです」という箇所からも、福音によって人は他の人々に対して一人のキリストとなる能力与えられているとする、ルターの義認に根ざした徹底的な平等主義的万人祭司説を用いていることがわかる。

次に上記のようにアルギュラが信仰の自由を得て信仰のために権威あるものに対して公けに、抵抗するようになったきっかけについて検討しよう。まず、既に述べたようにヴィッテンベルクのルターの思想に感化したことが挙げられる。ルターの教えの導入が比較的早かったインゴルシュタットは彼女が初めの結婚生活を過ごしたディートフルトから距離的に近かった。1522年11月から彼女の弟のマルケラスは、インゴシュタット大学の学生として登録していたが、しかし彼女の宗教改革思想についての関心はそれよりも以前に始まったと考えられる。なぜなら、ゼーホーファ事件の起こった1523年までに彼女はかなりの量のヴィッテンベルクの宗教改革者の著作を読み、また、それらの著作を学んだ上で、聖書を改めて読み返し始め、全体として彼女のそれまでの信心や考え方を改めて構築したと思われるからである。アルギュラの宗教改革思想への傾倒はもちろん、彼女の稀にみるキリスト者としての正義感と旺盛な知識欲そして彼女の積極性によるものであろうが、しかし、その改革思想を実践へと導くことになったのには、彼女の周辺に多くの改革思想を持った者たちがいたということが挙げられる。まず、彼女はブルクグランバッハにある、彼女の夫の家の近くにある、ヴェルツブルクにおいて、宗教改革思想をもった、ヤコブ・ブフェッファが主任司祭であるツァイリツハイムの聖堂参事会員ヨハン・フックスと交流していた。また早い時期に決定的な宗教改革思想の擁護者であった重要な学者であり、1521年まで聖堂の説教者であった、パウル・スペラトゥスとも交際していた。また、ルターと交流があり、お互い、敬愛しあう仲であったヴィッテンベルク大学の神学部長であったヨハン・フォン・シュタウピッツ⁹はアルギュラがクニグンデ大公妃に仕えていた時代から知己であった。たとえば、聖書の字義ではなく精神について強調したり、

人ではなく、神の恵みについて強調したり、迷信についての強烈な批判をもった、シュタウピッツの著作『神の愛』（1518年）はアルギュラの著作に実質的に影響したと考えられる。また、かなり早くから、彼女はニュルンベルクの宗教改革者アンドレアス・オジアンダーと交流し、彼女の長男と娘はオジアンダーの下で勉強をしていた。当時のドイツの宗教改革運動のネット網の中心であった市書記であり、宗教改革運動の最も活発な平信徒の弁護者、ラザルス・シュペングラールも彼女と交流があった。彼は、アルギュラがフリードリッヒ賢公の宮廷付き牧師シュパルティーンや、また、ルターやメランヒトンと連絡をとるのに仲介役をしてくれた。また、シュパルティーンを通して、ヴィッテンベルクについての情報を知ることができたり、アルギュラの著作の印刷屋を手配してくれたりした。彼女の著作に直接影響したと見られる人物には、元、フランシスコ会に所属していたがルターの感化で修道会を去り、ルターの同労者となったエーベリング・フォン・ギュンツブルク（1465-1533）やレーゲンスブルクの町の二人の説教者―バルタザール・フブマイヤー（1485-1528）とアルギュラと多くの似た記述のある『キリスト教書簡』（1523）を執筆し、また農民戦争の綱領宣言書『十二条項』の起草者として知られているセバスチャン・ロットァー（1490-1525）がいる。フブマイヤーは、特にレーゲンスブルクで有名な信仰復興運動の説教者である。かつてはインゴシュタット大学の教授であり、ユダヤ人を迫害していたが、後に改革思想を受け入れ、1524年からヴァルツフトに福音主義を導入した、そののち、再洗礼派となった人物である。

以上のようにアルギュラは多くの宗教改革者たちとの交流によって、ドイツとその周辺の宗教改革運動の動向について知り得たことは明らかである。そして、アウグスブルクの近くでの、1518年のルターとカヤタンとの対決、1519年のルター対エックのライプチヒ論争、1521年のウォルムス国会での審問とアルギュラはルターの活動をつぶさに聞き、知ったことであろう。また、実際に、レーゲンスブルクの年代史には、この時代のバイエルンに多くのルターの著作が持ち込まれたことや、また、それらについて討論するために数え切れないほどの非公式のグループが存在していたことが記されている⁽⁷⁾。

アルザシウス・ゼーホーファ事件が起こる前兆にはカトリック側の不気味な動きが色々あった。ミュンヘンの裁判所は宗教改革の思想を、すべての伝統と社会秩序を破壊するものとして見なし始め、1522年3月5日、ついにルターの教説を受け入れることに反対する厳しい命令を発した。インゴシュタット自体もルターの思想に対して敏感になり、異端として弾劾するようになっていった。1522年のクリスマスに、アルザシウスは、初めての厳しい警告を大学側から受けた。彼に対する連続した告発と逮捕の後、パウロの書簡の勉強やエラスムスの『対話』を研究していたグループは公然と彼に反対するようになった。既述のようにアルザシウスの逮捕に続いて、家宅捜査によって、有罪を示す証拠物件が摘発された。その逮捕について、彼の親族だけではなく、大学の同僚やギルドたちも、かなり、抗議した。しかし逮捕に対するさらなる波はこの勢いをそいだ。バイエルンのヴィルヘルム公は宗教的自覚は強くなく控えめな改革を歓迎し、ルターの改革思想を国家形成のプログラムを乱すものであり、また、皇帝や教皇との同盟を強固にすることへの脅威として見なしたのだった。神学的委員会はアルザシウスの過ちを17か条のリストにして、その過ちは直接、メ

ランヒトンの教説から引き出したものと結論した。そしてアイヒシュテットの司教の介入を防ぐために、大学と裁判所は一つの妥協に同意した。その妥協案はすなわち、もし、アルザシウスが、17箇条を放棄すれば、遠いエータル修道院に監禁することで彼の罰は減じよう、というものだった。9月7日に、全大学関係者のいるところで、アルザシウスは、涙ぐみながら、その思想を取り消し、将来、ルターの思想の一切を避けることを、彼の手の中の新約聖書を握りしめながら誓ったのであった。これ以降、プロテスタント側の不満は続き、特に、印刷屋や書籍販売業者たちは、カトリック側に対して軽蔑を露わにし、たとえば、個人へのミサや、マリア崇拜や聖人崇拜を非常に軽蔑したが、当局側はこれらのことを阻止しようと努めた。

アルギュラは、疑いもなく、この事件の裁判が世論操作のためのものだと判断した。彼女がそのような判断をしたのは、この事件を彼女が兄マルケラスから既に聞いていたオランダやハンガリーで起こっている迫害の状況の一部として受け止めたからであった。この危機の時に、彼女はいても立ってもいられず、幼い子供達と一緒に、ニュルンベルクの宗教改革者、アンドレアス・オジアンダーのところへ助言を求めて旅行したのだったが、既に記したように、彼からは適切な意見が得られなかった。そこで、彼女は9月20日にディートフルトに戻り、インゴルシュタット大学宛てに非常に率直で有効な書簡を作成し急送したのだった。それは彼女の著述の中で最も成功したものであり、この書簡とゼーホーファ事件の全容、彼の17の過ちのリストと彼の所信撤回の誓願、そして序文と結語を載せたパンフレットは、印刷屋を通じて発行され、二ヶ月足らずで14版に達したのだった。これは当時、いかにこの事件とそれに対する彼女の抗議に多くの人が関心を持っていたかがわかる。アルギュラは大学に宛てて手紙を書いた同日の9月20日に、第二の書簡をヴィルヘルム公にも送っている。

インゴシュタットの神学者たちによる彼女に対する言論攻撃の激しさは増すばかりであった。たとえば、インゴルシュタット大学のカトリック側の神学者ゲオルゲ・ハウワー博士は説教の中で、アルギュラを「鼻持ちならぬエバの娘よ、異端の性悪女よ、呪われるべき悪魔よ」とののしり、「苦痛のない出産をしたマリアと比較しておまえは子を産むとき、天使たちによってではなく、金切り声をあげる女性たちに囲まれ多くの苦しみと弱さを持つ哀れな女だ」と中傷した⁽⁸⁾。また彼女に対する当局の弾劾もかなりのものだった。ヴィルヘルム公への書簡から約一ヶ月後に書かれた『インゴルシュタット議会への書簡』には、彼女が死の脅威のただ中にあり、助けを求めていることがわかる。インゴルシュタット大学ではバイエルン公にアルギュラのことを報告し、バイエルン公はアルギュラの監督を夫に任せ、また以後、彼女が抗議文書を書かないように彼女の指を切り落とすように命じた。アルギュラの夫は彼女の一連の行為によって行政官としての職を辞し、そのために彼女につらく当たるようになったようである⁽⁹⁾。この後、彼女は迫害を恐れ、またお互いに理解し合えない夫と距離をおくため、ディートフルトを離れインゴルシュタット近くのレンティングに居を移し、その後、ヴェルツブルク近くのブルクブルムバッハで過ごした。この間、アルギュラはルターと文通したが、ルターは彼女を心から励ました。彼は彼女について、「バイエルン公は度を越して怒り狂っており、あらんかぎりの力を持って福音をなきものにしようと迫害しています。あ

の最も気高い女性であるアルギュラ・フォン・シュタウファーはバイエルンの地で偉大な精神を発揮し、大胆に発言しています。キリストが勝利されんことをすべての人が祈るべきです。インゴルシュタット大学がアルザシウス・ゼーホーファという青年に彼の信仰を撤回することを強制したので、夫人はこの大学を非難したのです。彼女に暴君ぶりを発揮している夫はその職を追われました。彼がどのようなことをするのかは大体見当がつきます。これらの怪物に取り囲まれて夫人はただ一人で強く信仰を守っていますが内心では恐れおののいているともらしています。夫人は特別なキリストの器です。キリストがこの弱い器を用いて、権力を誇る権威者どもを狼狽させ給うことを信じて夫人を支援します。」⁽¹⁰⁾と述べている。

1523年の秋、帝国国会がニュルンベルクで開かれプファルツ伯はその議会でアルギュラを招いた。彼女はそこでプロテスタント史上の、ロビイストの一人として、諸侯たちが宗教改革運動に対して中立の立場をとるのではなくこの運動に積極的に参加するように呼びかけた。さらに彼女はプファルツ伯に対してこの世の権力を恐れることなく、真理を証しするように求めた。また、彼女はフリードリヒ賢公宛てに、神が苦しんでいる人々に熱心に御言葉を宣べ伝えている人を強め、キリストを新たに十字架に付けている異教徒の司祭を押さえつけるように、と記している。さらに、彼女の叔父で高位に就いているアダム・フォン・テューリングが、彼女の風評を聞いて彼女に対して、非常に不快で迷惑に思っていることを知って、彼に宛て、書簡を送った。彼女は「わたしはルター派と言われています。そうではありません。わたしはルターの名によってではなく、キリストの名によって洗礼を受けたのです。しかし、ルターが真のキリスト教徒であることをわたしは言明します。」⁽¹¹⁾と自分の信仰を証しすると共に「夫はわたしの内なるキリストを大いに迫害しています。この点において、夫に従うことはできません。」⁽¹²⁾とはっきりと、信仰の自由について述べている。そして保守的で権威主義の叔父に対して恐れることなく「死ぬ前に福音書を読むように」と勧告さえしている。他方、インゴルシュタット大学では、1523年11月に学生はルターの教説を主張してはならないことを決定し、この決定により、インゴルシュタットは公けに反宗教改革運動の中心都市となっていった。アルザシウス事件に関連して1524年4月11日に、大学側はさらに、キリスト教徒の自由、信仰、希望、愛についての討論会を企画したが、福音主義者らは思想弾圧を恐れて、これに出席しなかったため、結局、この企画は失敗に終わった。5月にレーゲンスブルクで国会が開かれ、そこでルターに対してヴォルムス勅令を行使することが議された。アルギュラはレーゲンスブルクの議会で宛てて、彼らがサタンに唆されて神の言葉に反して権力を行使しようとしているとして侮辱を覚悟で抗議すると述べた。その年の初夏、インゴルシュタット大学の学生で、ヨハンと名乗る匿名の者から詩の形式で、アルギュラに対して挑戦があった。彼によれば、アルギュラは、女だてらに恥知らずで、恐れることもなく、博士であるかのように意見していると中傷した。そして彼女の意図は、純真な人々に対して聖書を用いてだますことだとした。故に、彼女が評判を回復し、自分の生活を守りたいなら、家庭内の役割にだけ専念すべきだと意見したのだった⁽¹³⁾。これに抗して彼女は、匿名の学生に対して、公の場に出て正々堂々と討論するように申し出ると同時に、彼の勇気の欠如を、彼女も詩の形式で応戦した⁽¹⁴⁾。1524年7月6日に、ついにインゴルシュタッ

トではヴィッテンベルク大学で学ぶことが禁じられた。1524年の秋、アルギュラは、彼女の考えを詩の形で発表した。これは彼女の最後の出版となったが、彼女の思想の発展にとって重要なものと考えられる。彼女はこの詩の再版において、常軌を逸した攻撃を受けたようであるが、しかし彼女は常にキリスト者としての自由をもって正々堂々と、挑戦してくる者に対して真摯に立ち向かった。彼女が本当に強いのは、論戦において、常に揺らぎのない聖書から答えを見つけ、述べることであったと考えられる。

最後の詩を刊行した1524年以後、アルギュラは筆を断っている。彼女の沈黙と同時に、当局のプロテスタントに対する警戒と検閲はますます強まり、故に、パンフレットの攻勢も不可能となったと考えられる。彼女は悪評の嵐にも関わらず、耐えていた。しかしながら、カトリック勢力の強いバイエルン地域に関する限り、宗教改革に対する彼女の高い期待は棄てなければならなかったのであろう。執筆を断念しなければならなかったのは、外的要因と共に個人的要因が考えられる。外的要因については、これまで述べてきたようにインゴルシュタット当局側からの弾圧や、他方、1524年6月に勃発したドイツ西南部の伯爵領における農民戦争にも大きく関係していたとみられる。また、個人的理由としては、福音主義者達のたくさんの著作を購入する費用、福音主義者の元へ助言を求めに行く旅費や急使を雇う費用、帝国議会までロビイストとして訪問する費用など、宗教改革運動を一個人で支援し続けることは、多額の出費であった。さらに、生活費はもちろん、四人の子供達にかかる養育費や学費、そして不動産の管理に関わる費用など、彼女の家計は財政的に非常に苦しくなっていたのも事実であろう。金銭的要因に加え、さらに、夫の失職、夫の死などもあり、個人的に苦しく困難なさまざまな要因があったと考えられる。

4. アルギュラによる宗教改革運動の意義

最後にアルギュラによる宗教改革運動の意義について考えてみよう。まず、彼女の運動は当時の人々に支持されたという点に意味があると考えられる。彼女は、8つの宗教改革文書を刊行したが、農民戦争前にその文書は2万9千部出版されたという。また、最初に書かれた『インゴルシュタット大学への書簡』は14版にもなったという⁽¹⁵⁾。すなわち、男性の宗教改革者たちと異なって、ラテン語の知識もなく大学教育も本格的な神学教育も受けていない平信徒で、女性であるということは、決してハンディにはならなかったのである。聖書のことなら、インゴルシュタット大学のすべての教授よりも精通していると彼女自身、断言している彼女の文書はおそらく、当時の一般大衆には分かり易く、また特に女性に支持されることによって多くの読者によって読まれたのであろう。彼女の提示した問題は同時代の、そして多くの女性たちが共感し、無数の声なき人々の意見を代弁していたのではないだろうか。すなわち、彼女が各文書で述べた、聖書の自国語の使用、聖書の至上主義、万人祭司主義、聖職者の責任、モラルと教育改革の必要の提示は、当時、強く求められていたものだったと解せる。彼女はヴィルヘルム公への書簡の中で、「教皇は悪魔の勧めに従って、司祭や修道士の結婚を禁じています。あたかも僧衣をまといば貞潔の徳が与えられるかのように、で

す。そうして、教皇は教職者の私生児から税金をとりたてているのです。ある司祭は年に800フローリンもの俸給を受けて、一年に一度も説教しないのですから、罰がくだるのも当然です。清貧の誓いをしたはずのフランシスコ修道会士たちさえ、やもめの家をくいものにしています。司祭、修道士、修道女は盗人です。神がそう言われるのであり、わたしもそう言明します。ルターがそう述べたとしても、それは事実なのです。恵み深き君侯たちよ、主イエス・キリストの羊の群れをおもんばかってください。彼らは金銀ではなく、主の尊い血潮によって贖われているものです。』⁽¹⁶⁾と記し、聖職者による財政的搾取と不道德な行状とを弾劾している。農民戦争前夜においてトマス・ミュンツァーが「神の国をこの世に実現しよう」と農民たちを率いて戦うようになったことからみても、当時の人々―男性のみならず女性も―が社会変革を強く求めていて、故に女性という弱い立場であるにもかかわらず、迫害を覚悟の上の決死の呼びかけはドイツ人全体の共鳴を獲得するものだったと考えられる。

第二の意義は、女性が公言できることの示唆である。彼女は大学の学者、行政官、諸侯という権力をもつ男性権威者たちへはっきりと自分の意見を述べることができた。しかし、彼女もまた、聖書の中でパウロが語っている「女性は男性に従うべきで教会で話をすべきではない」という警告に縛られ苦闘していた。しかし、アルギュラは既に述べてきたように、ルターのキリスト教徒の自由に基づく徹底的な平等主義の教説に触れ、また、聖書の中のデボラ、エステル等の戦闘的な女性たちとマリア、マルタ姉妹等の奉仕と慈愛に満ちた女性たちを味方に付けた。そして遂に「マタイによる福音書」10章32、33節「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前でその人を知らないと言う」という聖書箇所に出会い、公の場での発言は男女に与えられている平等のものであると解したのであった。彼女は、平信徒の女性たちに正々堂々と公に異議申し立てできる―抵抗することができる―新しい機会を示し、女性たちの宗教改革運動への参加を呼びかけることに貢献したのである。

第三の意義は上記の女性の公言できる権利に関連するが、権威ある者に対して一般の女性も抵抗する権利をもつことを実践したことである。彼女の関心は教会の改革にあるのではなく明らかに魂の救いにあった。彼女が、大学や行政官など上に立つ者へ言論を通して抵抗することができたのは、キリスト信仰者という立場においては皆、平等であると解したからである。そして彼女は世俗の権威に、当然、尊敬を払う一方、いかなる統治者も、行政官も、神の国を侵害することはできないとする一貫した姿勢をとった。彼女は「聖書のどこにキリストや使徒たちや、預言者たちがだれかを投獄したり、追放したり、焼き殺したり、殺害したり、記してあるでしょうか？われわれは行政官に従わなければならないと言われています。そのとおりです。しかし、教皇、皇帝、君公たちと雖も、神の言葉に対してなんの権威もないはずです。』⁽¹⁷⁾と述べている。すなわち、彼女は聖書を根拠に、女性も世の不正に対して異議申し立てできるという提言を言葉だけではなく、彼女自らが実践したことに意義がある。

5. 結語

本稿では、アルギュラ・フォン・グルムバッハが、いかにルターの改革思想を吸収し、それを彼女独自にいかにつ具体化したかを考察してきた。すなわち、それまでの教会が教え説いていなかったキリスト者の「自由」と平等という、ルターの教説に触れたアルギュラが、実際、インゴルシュタット大学において起きたルター派の一人の若者が神学的見解を強制的に撤回させられた事件をきっかけに、聖書研究をととして、女性も公けで抗議することがきるという解釈をした上で、自らが立ち上がり、カトリック教会を信奉する大学に対して、またローマ・カトリック教会に対して、議会に対して、その他公けの権威に対して、また私的には彼女の夫に対して、文書と論駁という手段をもって、不正、不義、不信仰に抵抗し、宗教改革運動を実践したことを考察した。彼女の異議申し立ては当時、センセーショナルなものであったことは疑いもないことである。アルギュラの宗教改革文書を考察することは、当時の人々の宗教改革運動に関する関わり方や権力者側の反応、また当時の女性の役割についての考え方を、生き生きとした証言として触れることができ、非常に意義あるものであると言えよう。しかしながら、アルギュラの活動が非常に短期間だったことは残念なことである。インゴルシュタット自体はカトリック教会側の牙城となっていく反面、ドイツ国内は、農民戦争へと向かい、行政官をはじめ、上に立つ権力者が一般大衆である農民を力で制し、国中が大混乱の事態となっていき、また個人的にも財政的困窮となり、ここに歴史の限界やアルギュラという個人の限界を考えさせられる。しかし、ルターの教説に学び、それを生の現実 に於ける課題として真摯に受け止め、自らの信仰の実現において実践しようとした16世紀初期のアルギュラという一人の女性の生き方に、現代人も学ぶところが大きいのではないだろうか。

〔注記〕

¹ ヴィルヘルム 4 世 (Wilhelm IV. 1493年11月13日 - 1550年 3 月 7 日) は、16世紀のバイエルン公 (在位: 1508年 - 1550年)。アルブレヒト 4 世とクニグンデ・フォン・エスターライヒの長男。一時、弟のルートヴィヒ 10 世とバイエルンを共同統治していた。父が長子相続を取り決めたことにより、1508年の父の死後に遺領を単独相続したが、弟のルートヴィヒ 10 世が共同統治を主張し、1516年にランツフート、シュトラウピングを共同統治領とした。宗教改革に初めは同情を示していたが、やがてカトリックに転向、ザルツブルク大司教と提携してドイツ農民戦争を鎮圧した。また、ボヘミア王位を主張してハプスブルク家と対立したが、1534年、フェルディナント 1 世とリンツで和睦した。1545年にルートヴィヒ 10 世が死去したため、改めてバイエルンを単独統治することになった。シュマルカルデン戦争ではカール 5 世 (フェルディナント 1 世の兄) の下で戦った。

² これまで彼女の亡くなったのは1554年説と1560年代説があったが、しかし、1556年に彼女がカテリーナ・メーレリン宛に法律上の争いを言及しており、1557年にヴィルヘルム公宛のカテリーナの手紙にはアルギュラを「故アルギュラ」と記していることから彼女が亡くなったのは1556年もしくは1557年とみなされる。(Peter Matheson ed., Argula von Grumbach, Heidelberg, 2010, pp. 25-26)

³ ヨハン・エックは本名をマイヤーと言い、1486年に、エッグ・アン・デア・ギュンスに生まれ、1543年にインゴルシュタットで亡くなっている。彼は当時のドイツでドミニコ派を代表し、1519年のライプツヒヒ討論ではルターと論戦した。

⁴ Peter Matheson ed., Argula von Grumbach: A Woman's Voice in the Reformation, 1995, pp. 91-93

⁵ アルサウス・ゼーホーフによる無効にされ否認された条項

ミュンヘンの市民であり、文学修士である、私、アルサシウスは、私が私自身の手で書いたこの書き物によって、私が手に持って告白する聖なる聖書によって、誓い、そして、これによって、名高いインゴルシュタットの大学の学長と評議委員会と大学の全共同体であるあなたの方の前で、私自身の口で読み、宣言する。

私はこれまで、ルター派の誤った異端の考えとさまざまな罪に関わっていて、神を冒瀆する者と疑われてきたが、すなわち、私はそれを教え、書き、支持するという多くの方法で、広めてきたし、また、ドイツ語に全力を尽くして翻訳した。そして、結果として、大学の学長や評議委員会に、その罰を待つため、投獄された。(異端の擁護者達が普通法で罰せられるように)。しかしながら、私は特別な命令と、高貴な生まれの君主や貴族達、すなわち、兄弟であり、パラティンの伯爵である、ヴィルヘルム伯やルードヴィヒ伯という彼等の卓越した親しい好意により許されたのである。そして、この恐ろしい罰は取り消されたのである。もし私が今、わびて告白するなら、私のあやまちを無効にすると。だから、私はこれによって、私のとった講義の中でのフィリップ・メランヒトンの書いた物から読んできたものみな、また、私が話し、あるいは書いてきて、大学の書記によって読んできたものはみな、最も恐ろしい主なる異端で不正行為であったと、告白し、また、神聖である教皇や帝国の皇帝や私の最も尊敬すべき君主達による禁令に従って、私は決して再び、それに固執したり、利用したりしたくない。しかし、一敬虔なるキリスト者にふさわしいように一聖なるローマ教会や聖なる評議委員会によって非難されたり、規定されたものをすべて信じたいし、私たちの親切な君主たちによってするように命じられることなしに、身も心も、エッタル修道院を離れず、行きたいのであって、それで、私はルターの思想を読むことも広める望みも持っていないのである。全能なる神よ、私を助けたまえ。(Peter Matheson ed., Argula von Grumbach: A Woman's Voice in the Reformation, 1995, pp. 93-94)

⁶ アルザシウスは修道院に監禁されたが、脱走してヴィッテンベルクへ逃れた。以後、プロイセンで牧師となり、唯一の著書『福音書注解』1539年に執筆した。最初の説教学の手引きと言われている。1542年に亡くなっている。

⁷ オジアンダー、アンドレアス (Osiander, Andreas 1498-1552) ドイツの宗教改革者、ルター派神学者。バイエルンに生まれ、インゴルシュタットで学んだ。ケーニヒスベルク大学の教授となり、牧師を兼任した。彼は贖罪論的でなく、神秘主義的であり信仰によって義とされるのはキリスト自身が罪人の中に宿ることにより、またその神性にのみよると論じた。彼の説に対してメランヒトンその他のルター派の宗教改革者たちが赦罪を軽視するものであるとして反対した。

⁸ シュパラティーン (Spaltin, Georg 1484-1545) は1516年以来、宮廷顧問官として教会と大学の問題を担当し、ルター、メランヒトンと共に大学改革に当たる。1525年牧師となり28年アルテンブルクの教区長となった。領邦君主統合の新しい教会組織の形成に尽力、ザクセン教会と学校を熱心に巡回して歩いた。

⁹ シュタウピッツ (Staupitz, Johann von 1468-1524) はテュービンゲン、ミュンヘンの修道院長を経てザクセン選帝侯フリードリッヒ賢公によって新設のヴィッテンベルク大学に招かれた。ルターと交流を持ち、彼に大きな助けを与えた。しかし彼自身の神学的基礎は中世のものであった。

〔引用文献〕

- (1) Peter Matheson ed., Argula von Grumbach: A Woman's Voice in the Reformation, Edinburgh, 1995, pp. 53-54
- (2) Peter Matheson ed., ibid., p. 145
- (3) 『ルター』(世界の名著23), 松田智雄(編), 中央公論社, 1979年, 27頁
- (4) 同掲書, 507-508頁
- (5) 同掲書, 94頁
- (6) Peter Matheson ed., ibid., pp. 75-90の要約である。
- (7) Peter Matheson ed., ibid., p. 13
- (8) Peter Matheson ed., ibid., p. 19
- (9) Peter Matheson ed., ibid., p. 20
- (10) Peter Matheson ed., ibid., p. 21
- (11) Peter Matheson ed., ibid., p. 108-109
- (12) Peter Matheson ed., ibid., p. 144
- (13) Peter Matheson ed., ibid., p. 22
- (14) Peter Matheson ed., ibid., p. 22
- (15) Peter Matheson ed., ibid., p. 2
- (16) Peter Matheson ed., ibid., p. 145
- (17) Peter Matheson ed., ibid., p. 76

【一次文献】

Wie eyn Christliche//fraw des adels/in Beiern durch//jren jn Gotlicher schrifft/wolgegründ//ten Sendtbrieffe/die hohenschul zu Jngold=stat/vmb das sie einen Euangelischen Jung//ling/zu wydersprechung des wort//Gottes betragt haben//straffet. (Nürnberg:Friedrich Peypus 1523) 7 Bl.4⁰

Peter Matheson (ed.), Argula von Grumbach, Heidelberg, 2010

Peter Matheson (ed.), Argula von Grumbach: A Woman's Voice in the Reformation, Edinburgh, 1995

【参考文献】

徳善義和（編），『マルチン・ルター ―原典による信仰と思想―』，リトン，2004年

T. カウフマン，『ルター』，宮谷尚美（訳），教文館，2010年

R. バイントン，『宗教改革史』，出村彰（訳），新教出版社，1966年

『ルター』（世界の名著23），松田智雄（編），中央公論社，1979年

ウルリッヒ・ドウフロウ，『神の支配とこの世の権力の思想史』，佐竹／泉（共訳），新地書房，1980年

徳善義和，『キリスト者の自由』，新地書房，1985

ウィリントン・ウオーカー，『宗教改革』，塚田／八代（共訳），ヨルダン社，1983年

『宗教改革著作集』，第七巻，徳善／田中／他4名（共訳），教文館，1985年

Bernhard Kirchmeier, Argula von Grumbach, Norderstedt, 2008

Lyndal Roper, The Holy Household, Oxford, 1989

Peter Matheson, The Imaginative World of the Reformation, Edinburgh, 2000

Peter Matheson, The Rhetoric of the Reformation, Edinburgh, 1998

Peter G. Wallace, The Long European Reformation, Hampshire, 2004

R. Po-chia Hsia (ed.), The German People and the Reformation, London, 1988

Roland H. Bainton, Women of the Reformation in Germany and Italy, Boston, 1971

Roland H. Bainton, Women of the Reformation in France and England, Boston, 1973

Sherrin Marshall (ed.), Women in the Reformation and Counter-Reformation Europe, Bloomington, 1989

Sonja Domrose, Frauen der Reformationszeit, Gettingen, 2010

Thomas R. Rumsey, Men and Women of the Renaissance and Reformation, London, 1981

Wie ein Christliche frau des abels / in

Bayern durch iren/in Gotlicher schufft/wolgegrund
tenn Sendbrieffe/ die hohenschul zu Ingoldstat/
vmb das sie eynen Euangelischen Jungling/zu
widersprechung des wort Gottes/betrangt
haben/straffet.



Auch volgen hernach die artickel/so Magister Arfacus
sehoßer von Albanen durch die hohenschul zu Ing
gelstat beredt am abent vnser frawē geburt nechst
verschinen widerruffen vnnnd verworffen hat.

Actum Ingelstat. M D XXIII.

Matthes Maler 発行（1523年刊）の『インゴルシュタット大学宛ての書簡』の表紙の木版画
（Peter Matheson ed., Argula von Grumbach, Heidelberg, 2010, p.59より）